

ラ・バヤデー

(牧阿佐美版)

2011.1/15 ~ 23

レパートリー
Repertory

La Bayadère

オペラパレス | 5回公演

振付: M. プティパ

Choreography: M. Petipa

演出・改訂振付: 牧阿佐美

Revised by Maki Asami

作曲: L. ミンクス

Music: L. Minkus

編曲: J. ランチベリー

Arranged by J. Lanchbery

舞台美術・衣裳: A. リヴィングストン

Designs: A. Livingston

照明: A. リヴィングストン / 磯野 睦

Lighting: A. Livingston / M. Isono

指揮: 未定

Conductor: TBA

管弦楽: 東京交響楽団

Orchestra: Tokyo Symphony Orchestra



ビントレー次期芸術監督が世界中で最も完成度が高い『ラ・バヤデー』と絶賛する牧阿佐美版

2000年11月に牧阿佐美舞踊芸術監督の改訂振付第1作として新制作された『ラ・バヤデー』は、古典バレエの様式美を存分に堪能できる演出、スピード感あふれるスペクタクルな舞台展開、豪華でオリエンタルな深い色彩の舞台美術によって、既成の版にはない斬新さを示して大成功をおさめました。各国でバレエを見てきたビントレー次期芸術監督が世界中で最も完成度が高い『ラ・バヤデー』と絶賛、今回の3度目の再演が決定しました。

当プロダクションの特徴は随所にあります。例えば、夢の場の精霊の踊りは、3段の九十九折スロープをゆっくりと舞い降りる精霊たちの姿が圧巻。また、物語の最後では寺院が轟音とともに崩壊し、その廃墟の中をニキヤとソロールが共に天に昇って行くシーンも息を呑むように美しい。なお、この終幕場面の音楽は、バレエ界の名指揮者・名編曲者で知られた故ランチベリーが、特に新国立劇場版のために編曲しています。

登場人物が織り成すドラマも『白鳥の湖』や『眠れる森の美女』といった古典作品にない魅力があります。寺院に仕える舞姫ニキヤは清楚で内に秘めた強さを持っています。恋人で王に仕える騎士ソロール、ソロールを慕う王の娘ガムザッティのニキヤとの確執、ニキヤを憎からず思う大僧正など、そうした複雑な人間ドラマを演ずるそれぞれのキャストを楽しみに公演に足を運ぶ観客も多い作品です。

ものがたり

インドの寺院に仕える舞姫ニキヤはラジャー（王侯）に仕える若い隊長ソロールと恋仲である。ニキヤに思いを寄せる大僧正はニキヤを手に入れようと機会をうかがっている。一方、ソロールが仕える王の娘ガムザッティはソロールとの結婚を望み、王の命にそむくことが出来ないソロールは心ならずも結婚を承諾してしまう。絶望するニキヤは毒蛇にかまれ、解毒剤を差し出す大僧正の手を振り払って絶命する。後悔の想いの中で夢を見たソロールは夢の中でニキヤと再会して至福のときを過ごすのが、彼が夢から覚めたとき、愛の力か、はたまた神の怒りか、寺院が轟音のなかで崩壊していく……。



マリウス・プティパ(1818～1910)

Marius Petipa

1818年フランス・マルセイユ生まれ。舞踊家、舞踊教師、振付家。13歳のときに父の作品で舞台デビューを果たし、47年にサンクトペテルブルグの帝室ポリショイ劇場に招かれた。55年からは父の後任として、劇場附属バレエ学校で、踊りと得意としていたマイムの教師を兼任している。62年に振り付けた『ファラオの娘』が大成功し、副バレエマスターに就任。69年にはサン＝レオンが退任したため、首席バレエマスターとなる。以後『ドン・キホーテ』(1869)、『ラ・バヤデール』(1877)、『眠れる森の美女』(1890)、『白鳥の湖』(1895、イワーノフと共作)、『ライモンダ』(1898)など、数々の傑作を残しロシア・バレエの伝統を確立した。1903年初演の『魔法の鏡』まで、改訂振付を加えれば70以上の作品をロシアで振り付けている。10年、クリミア地方グルズフで亡くなった。



牧 阿佐美

Maki Asami

日本バレエ界の草分けの一人、橋秋子の長女として生まれる。4歳で初舞台を踏み、20歳の時に米国に留学、A.ダニロフ、I.シュヴェッツォフに師事。その後、橋バレエ団を基礎に、橋秋子と共に牧阿佐美バレエ団を設立し、プリマ・バレリーナとして数々の作品に主演。昭和35年には、日本で初めて外国人ダンサーを相手役に全幕バレエ『コッペリア』を踊り、絶賛を浴びる。橋秋子の没後はその遺志を継いで舞台を退き、牧阿佐美バレエ団主宰者、橋バレエ学校校長となり、その卓抜した指導力で、日本を代表する舞踊手を数多く世に送り出す。また振付家としても活躍する一方、海外より多数の著名な指導者や振付家を招き、国際共同による質の高い舞台制作を手がけている。ニムラ賞、芸術選奨文部大臣賞、東京新聞舞踊芸術賞、舞踊批評家協会賞、橋秋子賞特別賞を受賞。平成8年(1996年)秋には、多年にわたり数多くの作品を振り付け、発表し続けた功績により紫綬褒章を受章。2004年2月フランス政府から芸術文化勲章シュヴァリエを受ける。08年5月には日本人として初めてブノワ賞の審査にあたった。08年に平成20年度の文化功労者に選ばれた。振付家としての主な経歴は、1965年『火の鳥』、67年『眠れる森の美女』をイゴール・シュヴェッツォフと共同振付して主役を踊り、衣裳デザインも自ら手がけて上演した。68年には振付家として本格的にデビューし、黛敏郎作曲『ブガク』、芥川也寸志作曲『トゥリプティーク』、團伊玖磨作曲の『シルクロード』を振付して注目された。最近では95年に『ロメオとジュリエット』、98年に『椿姫』をアザーリ・プリセツキーと共同振付して絶賛を浴びた。新国立劇場バレエ団への全幕物の演出・改訂振付第1作目として2000年11月に『ラ・バヤデール』を手掛け好評を博した。第2作目は04年10月に『ライモンダ』全幕改訂振付、この作品で朝日舞台芸術賞を受賞した。第3作目に06年11月に『白鳥の湖』を改訂振付・演出し、高い評価を得た。07年には新国立劇場完全オリジナルの『椿姫』の振付・演出にあたり、第7回朝日舞台芸術賞を受賞。

1999年から2010年まで新国立劇場舞踊芸術監督を務め、ワシントン・ケネディーセンター公演(「ジャパン・フェスティバル」参加)とモスクワ・ポリショイ劇場公演「椿姫」の海外公演を大成功に導くなどバレエ団の育成と発展に大きく寄与した。